

平成 30 年 9 月 7 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17343

研究課題名(和文)ドイツにおける学校田園寮運動の変容に関する研究 - 学童疎開との関係に焦点を当てて -

研究課題名(英文) Research on the Transformation of Schullandheimbewegung in Germany: Focusing on the Relationship to Kinderlandverschickung

研究代表者

江頭 智宏 (Egashira, Tomohiro)

名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授

研究者番号：40403927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦下ドイツの学童疎開と、教育活動の深化を目的として自然豊かな地域に設けられた宿泊型教育施設である学校田園寮(Schullandheim)の普及拡大を目指した学校田園寮運動の関係に焦点を当てた研究である。ハンブルクの学童疎開を中核で担ったハインリヒ・ザールハーゲを始めとする学校田園寮運動の指導者たちが、学童疎開を学校田園寮運動と同一視できるものと位置付けることで学度疎開もまた「優れた教育活動」であると捉えて学校田園寮運動の如く学童疎開を進めたことを明らかにし、その起源も含めて本質的には全く異なる学校田園寮運動と学童疎開が、表面的な類似性のために結び付けられたことの問題を指摘した。

研究成果の概要(英文)： This is a research that focused on the relationship between the German Kinderlandverschickung (evacuation of school children during WW II) and Schullandheimbewegung (movement for the expansion of school rural study center).

This research revealed the followings: 1) Heinrich Sahrhage (he was a typical leader of Schullandheimbewegung and he was also a leader of Kinderlandverschickung in Hamburg) and other leaders of Schullandheimbewegung insisted on an essential similarity between Schullandheimbewegung and Kinderlandverschickung; 2) they saw Kinderlandverschickung as an "excellent educational endeavor" as well as Schullandheimbewegung; 3) they mimicked the system of Schullandheimbewegung when carrying-out the Kinderlandverschickung system.

And finally this research indicated the problem that two completely different things were related to each other because of superficial similarity.

研究分野：ドイツ現代教育史

キーワード：学校田園寮運動 学童疎開 ハインリヒ・ザールハーゲ

1. 研究開始当初の背景

記入者は、新教育運動の「遺産」のナチス体制下での利用という問題への関心のもと、ナチス体制下で多くの新教育運動が終焉を余儀なくされていった中で、新教育運動の一翼を担いながらも終焉を迎えることなく存続した学校田園寮運動に焦点を当てて研究を行ってきた。そして、学校田園寮をナチス体制下での重要な教育の構成要素として位置付けようとする政府の姿勢とそれに便乗して学校田園寮運動の普及拡大に奔走する学校田園寮運動の指導者の動向や、学校田園寮を意のままに利用したいと画策する HJ の指導者の動きを前にして学校田園寮のナチス体制下での重要性を主張しながら学校田園寮運動の領域保持を求めた学校田園寮運動の指導者の動向、などについて検討した。しかしながら、記入者のそれまでの研究では、ナチス体制下での変容を捉えるためにヴァイマル期の学校田園寮運動には言及されている一方で、ナチス期に関しては、基本的には、第二次世界大戦の開戦以前までしか対象にしてこなかった。そうした記入者の研究上の空白を埋めるべく、本研究では、ナチス体制下での子どもたちのナチ化の最終的段階と言える学童疎開との関係の中で捉えることを通して、第二次世界大戦期の学校田園寮運動に正面から焦点を当てた。

また、記入者の研究における対象時期のレベルでの空白に加えて、研究全体においても、学校田園寮運動は学童疎開と深い関係があったにも関わらず、学校田園寮運動研究においては学童疎開についてほとんど触れられない一方で、学童疎開研究においても、学校田園寮運動への言及は部分的に見られるものの正面から取り上げられてはいないという研究状況が見受けられた。

2. 研究の目的

ハンブルクの中高等学校の教員であり、ハンブルクを拠点として学校田園寮運動に従事したにハインリヒ・ザールハーゲ (Heinrich Sahrhage, 1892-1969) から学校田園寮運動の指導者の多くが、学童疎開に関与していた。そうした事情を踏まえると、ドイツでは、学童疎開が学校田園寮運動と表裏一体となって実施されていたという見方もできる。そしてそのような見方は、ヴァイマル期の新教育運動の一翼を担った学校田園寮運動を通して獲得された進歩的な教育のノウハウが、学童疎開という戦時下の国策としていわば利用されていたことを意味するものであり、そうした新教育運動の「遺産」がナチス体制下で国策として利用された様相を浮き彫りにすることが本研究の主たる目的である。

また、上述の目的を補完する形で、学童疎開という戦時下のナチスの政策が「美化」される様相を浮き彫りにすることもまた本研究の目的である。戦時下での子どもの生命を救う政策であるということが学童疎開を推進するうえでアピールされたことに加えて、学童疎開の名称の面でも、保養のために自然豊かな環境に一定期間子どもたちを滞在させる福祉政策を意味する Kinderlandverschickung を借用して Erweiterte Kinderlandverschickung が用いられた (即ち学童疎開とは、Kinderlandverschickung が拡大されたものである) ことから、学童疎開にはそれを「美化」させる要素が根本的に付与されていた。そうした要素と共に、新教育運動に源流を有する学校田園寮運動とのアナロジーのもとで学童疎開が捉えられることもまた、学童疎開を「美化」させるものであったとみることができるのである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、文献研究の手法をとり、主にドイツの文書館や図書館での史資料の収集とその分析を行なうことを通して研究を進めていった。

活用した文書館としては、まずはハンブルク州立文書館が挙げられ、当館において、ハインリヒ・

ザールハーゲに関する資料や、彼が中心となって進めたハンブルクの学童疎開に関する資料を収集した。また、「学童疎開の史料編纂に関する活動共同体」が収集した史料のファイル（Zsg140）を保有していると共に、ナチス教員連盟やヒトラー・ユーゲントのファイルの中に全国レベルでの学童疎開の動向に関する多数の資料が収められているベルリンの連邦文書館も利用した。その他、シュトゥットガルトのバーデン・ヴュルテンベルク州立中央文書館でも史料収集に従事した。

図書館に関して最も活用したのは、ライプツィヒの国立図書館であり、当館において、機関誌『学校田園寮』を収集すると共に、ザールハーゲを始めとする学校田園寮運動の指導者たちの著作物を収集した。それから、ベルリンにある教育史研究図書館やフンボルト大学図書館においても、ザールハーゲら学校田園寮運動の指導者たちが著した文献等の収集に従事した。

ドイツでの史料収集に際して最も力点をおいたのはハンブルク州立文書館であったが、ハンブルク滞在中には、併せて、ハンブルク大学教育学部のティルマン・グランメス（Tilman Grammes）教授より研究上の示唆を受けた。

4. 研究成果

最初に本研究に関わる先行研究の分析に当たった。ただし、両者の関係自体に真正面から迫った研究は管見の限り見られないため、学校田園寮運動研究の中に見られる学童疎開に関わる記述や、学童疎開研究ならびに学童疎開に関する史料集の中に見られる学校田園寮運動に関わる記述を対象とした。具体的に相上に載せたのは、G.ダーベル『学童疎開 1940～1945年の学童疎開と学童疎開キャンプ - 「あらゆる時代における最も大きな社会的試み」に関する史料 -』（1981年）、C.クレツセル『比較のなかのイギリスとドイツの学童疎開 - 都市リバプールとハンブルクの事例』（1996年）、G.コック『>>総統が子どもたちのことを心配している<< - 第二次世界大戦における学童疎開 -』（1997年）、K.ケーニッヒ「75年間の学校田園寮運動 - 学校田園寮運動と学校田園寮教育の歴史について - 第2部：権力掌握の前夜からナチス教員連盟の活動停止まで（1933-1943/1945）」（ドイツ学校田園寮連盟『学校田園寮』第185号（2000年）に掲載）、E.マイラーン『学童疎開キャンプの目録化』（2004年）である。

上掲した先行研究の考察を通して、学校田園寮運動と学童疎開の間には、第1に、学校田園寮が物理的に学童疎開キャンプとして用いられたという意味での物的な繋がり、第2に、学校田園寮運動を担った教員たちが学童疎開に関与したという意味での人的な繋がり、第3に、学校教育の範疇の拡大を目指した学校田園寮運動を指針として学童疎開の中に「新たな学校教育」の可能性を探っていたという意味での理念的な繋がり、という3点に亘る繋がりが存在していたことを明らかにした。そしてそのうえでさらに求められることは、教育学的見地からより重要であると言える人的な繋がりと理念的な繋がりに関して、先行研究では両者がそれぞれ独立して探求されているので、両者を結び付けて考えることを通してさらにそれらを掘り下げることが重要であると結論付けた。

さて、人的な繋がりと物的な繋がり結び付ける方法とは、具体的には、学校田園寮運動を担ってきた一方で学童疎開にも関与した教員たちが抱いた学童疎開への認識を探ることである。そのため本研究の中心に、彼らの学童疎開に対する認識を位置付け、とりわけまずは、ハインリヒ・ザールハーゲの学童疎開認識を取り上げた。ザールハーゲをまず対象とする理由は、彼が、ドイツ学校田園寮全国連盟では理事を務めると共に、戦後発足したドイツ学校田園寮連盟では初代会長を務めるなど、ヴァイマル期からナチス期を経て戦後期に至るまで一貫して学校田園寮運動の指導者であり続けた一方で、第二次世界大戦下では地元のハンブルクにおいて学童疎開の中心的な役割を務めたという点で、学校

田園寮運動と学童疎開の最も結節点にあり、当該テーマについて考察するうえで最適の人物だからである。

ハンブルク州立文書館所蔵の未公刊史料を主として使用したザールハーゲの学童疎開認識に関する研究において、まずは彼の経歴を跡付けて、戦時中は学童疎開の功績ゆえに二度勲章を受けた一方、占領期には学童疎開への関与ゆえに降格処分が下されていることに見られるような、彼と学童疎開との深い関係を指摘した。加えて学校田園寮運動の実績ゆえにザールハーゲが学童疎開に関与するようになったことや、学童疎開の遂行のために彼が学校田園寮運動関係者を動員したことなども指摘し、ハンブルクでは、学校田園寮運動と学童疎開が人的に密な関係にあったことを述べた。

そのうえで、戦時下におけるザールハーゲの学童疎開認識について、学校田園寮運動との関係という観点から以下のことを論じた。彼は、学校田園寮運動と学童疎開は同一視できるものであり、学校田園寮運動は学童疎開の先達者であると同時に戦後はその後継者になりうるとして、両者を密接に関連付けた。そしてその根拠を、学校田園寮での教育と学童疎開キャンプでの教育が、双方共に共通して、「知識の伝達者」から「教育者」へと教師像の転換が図られる、観察や体験に基づいた授業が実施される、人格形成や身体形成を重視する教育が重視される、生活・教育・授業・健康管理などの諸領域が統一される、などの諸特徴を有していることなどに求めている。これらの諸特徴は概ね、ドイツ新教育運動においても広範に見られたものであることを考えると、彼は、学校田園寮運動と学童疎開との繋がりを強調することで、戦争の中で生まれた国策としての学童疎開もまた新教育運動の流れを汲むような「教育活動」と捉えていることが分かり、そのことが学童疎開への積極的な関与を生み出していったといえる。加えてザールハーゲは、戦局の状況に関係なく学童疎開は学級単位で実施すべきであることを主張し続けており、そうした姿勢からは、彼が学校田園寮運動の如く学童疎開を実施していこうとしたことが窺える。

こうした戦時下での認識と並んで、戦後におけるザールハーゲの学童疎開認識にも目を向け、1953年にハンブルクの学校局に宛てた書簡などを根拠として、彼はどこまでも教育活動として学童疎開を捉えていたことを明らかにした。

上述したザールハーゲの学童疎開認識に関する研究をより一般化すべく、ドイツ学校田園寮連盟発行の機関誌『学校田園寮』(ただし本研究が対象とした第二次世界大戦下では、正確には、連盟をナチス教員連盟内に編入する形で発足した「ナチス教員連盟教育者中央局内の学校田園寮のライヒ専門領域」が当機関誌を発行している)の中で学童疎開特集が組まれた第104号や113号などに目を向け、再度ザールハーゲも含む形で広く学校田園寮運動指導者の学童疎開認識に目を向けた研究を併せて行なった。そして、学校田園寮運動が、国策である学童疎開に人的にも物的にも協力していること(そして今後とも一層協力すべきこと)を内外に向けてアピールすべく、学校田園寮運動と学童疎開は同一視し得るほど根本的な点において類似していることから両者は深い繋がりを有しており、戦後は学校田園寮運動が学童疎開を継承すべきである、といったような学童疎開に対する認識が、やはり主張されていたことを明らかにした。

以上のような、ザールハーゲを始めとする学校田園寮運動の指導者の学童疎開認識という形で具体的には展開させた、学童疎開との関係に焦点を当てた学校田園寮運動の変容に関する研究を通して、学校田園寮運動が第二次世界大戦の遂行に結果的にはあるにせよ深く協力したということは否定できないということ共に、学校田園寮運動と学童疎開という、もっと言えば進歩的な教育改革運動とナチスの戦争という、本来は全く性格の異なるものが表面的な類似性をもって容易に結び付けられてしまうことの恐ろしさについて最終的に言及した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

1. 江頭智宏「第二次世界大戦期ドイツにおける学校田園寮運動の指導者たちの学童疎開認識に関する考察 - 機関誌『学校田園寮』に焦点を当てて - 」『教育史研究室年報』(名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室)第23号、2018年3月、pp.1-30、単著
2. 江頭智宏「第二次世界大戦下ドイツ・ハンブルクの学童疎開への学校田園寮運動の関わりに関する考察 - ハインリヒ・ザールハーゲの学童疎開認識に焦点を当てて - 」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学編〕』第64巻第2号、2018年3月、pp.67-81、単著
3. 江頭智宏「第二次世界大戦下ドイツにおける学童疎開と学校田園寮運動の関係について」『教育史研究室年報』(名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室)第22号、2017年1月、pp.57-77、単著

[学会発表](計1件)

1. 江頭智宏「ハインリヒ・ザールハーゲにおける第二次世界大戦下ドイツの学童疎開認識に関する考察 - 学校田園寮運動との関係に焦点を当てて - 」九州教育学会第69回大会(鹿児島大学)2017年11月

6. 研究組織

- (1)研究代表者 江頭智宏(EGASHIRA Tomohiro)(名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授)
研究者番号:40403927